

令和元年度 鳥取県議会台湾訪問団 報告書

[2019年10月23日(水)～10月26日(土)]



《裕毛屋(公益店)にて、台中市議会議員、台中市政府職員など関係者の皆さんと》

鳥取県議会

1 訪問日程及び訪問先

令和元年10月23日（水）～10月26日（土）

台湾（中華民国） 台北市、新北市、台中市

※詳細は「4 日程表」のとおり

2 訪問団メンバー

団長 伊藤 保 議員

副団長 浜崎 晋一 議員

秘書長 西川 憲雄 議員

中島 規夫 議員

常田 賢二 議員

山川 智帆 議員

<随行> 議会事務局 総務課 課長 前田 いづみ

調査課 係長 澤田 稔

3 所感及び県政に対する提言

今回の県議会による台湾訪問団は、本県のインバウンド観光の振興、本県との地域間交流の現状や今後の可能性を探るとともに、県産品の輸出拡大・販路開拓策等について調査することを目的に、台北市、台中市などを訪問した。

日本と台湾は、昭和47年（1972年）の日中共同声明により国家間の正式な国交を失ったものの、依然として緊密な人的往来と文化交流、そして重要な経済パートナーとして良好な関係を維持してきた。本県においては、平成9年（1997年）に梨の穂木の輸出をきっかけとして交流を開始。平成12年（2000年）に知事が訪問して以降、農業、観光、スポーツ、文化など、民間交流を含む多岐にわたる分野での交流を継続している。交流開始から20年目となる平成29年（2017年）には、それまでの文化観光分野における交流を礎に、観光交流局長と台中市政府観光旅遊局長との間で観光交流協定を締結するに至り、昨年の平成30年（2018年）には知事と台中市長との間で、本県としては海外8例目となる友好交流協定を締結し、未来に向けた青少年交流をはじめ、観光・物産、スポーツなど幅広い分野でより一層の協力関係を維持・発展させていくこととなった。

県議会としても、議員団を編成してこの友好交流協定の記念すべき調印に立会し、本県と台中市との官民交流の証を確認したところであるが、もとより台湾への議員団公式訪問は平成16年（2004年）に始まり、台中市へは旧台中県時代を含め平成17年（2005年）以降2年を空けずに交流を積み重ねており、今回の訪問は通算11回目を数えるものとなった。

今回の訪問団では、友好交流協定を締結した台中市政府のほか、台中市議会や台中市内のサイクリングロード視察などを通じて地域の観光資源活用策について調査したほか、日本台湾交流協会や台湾日本関係協会、中華航空台北支店を訪問し、昨今の訪日客動向などについて意見交換した。また、百貨店やスーパーなどに販路を持つ農産物輸入卸業の商田實業、和牛肉を扱う高級レストランチェーンを展開する乾杯集団においては、それぞれすでに取扱いのある県産品の現地における評価や、今後のさらなる輸出拡大・販路開拓の可能性について御意見を伺った。さらに、台中

市内の地元スーパー裕毛屋公益店においては、店内で開催中の鳥取県物産展の視察のほか、地元農協関係者等を含めた意見交換を行った。

以下、これらの概要と成果を報告する。

始めに、本県のインバウンド観光の振興に向けた課題などを中心に、本県との地域間交流の現状と今後の可能性について、現地調査に基づく所感について具体的に述べたい。

日本と台湾との交流を支援する実務機関として、重要な役割を担う台湾側の台湾日本関係協会（旧亜東関係協会）及び日本側のカウンターパートとなる公益財団法人日本台湾交流協会によると、昨年（平成30年（2018年））の日台間の人的往来は680万人を超え、過去最高を更新した。インバウンド・アウトバウンドの不均衡があるものの、日本人訪台者数は約197万人、台湾人訪日者数は前年比4.2%増の約476万人で8年連続の増、東日本大震災の影響で減少に転じた2011年と比較して約4.8倍となっており、今年（平成31年・令和元年（2019年））の推計値においては訪日台湾人旅行客数が500万人突破を目前とする水準が期待され、相互に過去最高を更新する勢いである。

本県の国別外国人延べ宿泊者数をみると、米子ソウル便やDBS航路といった空路・海路の玄関口を有する優位性から、韓国からの受け入れが最も多く3割以上を占めており、台湾からの入込客数は、平成30年（2018年）は約19万人のうち12.5%、全体の3番目となっている。

一方、岡山県や広島県、四国各県のほか、東北地方などにおいては、国籍（居住地）別外国人延べ宿泊者数の構成割合の中では台湾からの受け入れが最も多く、定期直行便の就航はもとより、台湾での認知度向上のため単体ではなく複数の自治体や観光団体が広域的に連携してプロモーション活動を行い、個人旅行者を中心とする広域周遊旅行ニーズに効果的に訴求できていることにあるものと見られる。

本県としては、例年就航が実現している連続チャーター便の継続的な運航と、将来的には定期便化をも目指すべく努力し続ける必要があり、またそのためにも、定期直行便が就航する岡山空港や広島空港のほか、台湾からの圧倒的な求心力を有する関西圏と比較的距離が近い本県の地理的優位性を踏まえて、例えば台湾からの旅行客の数日間の滞在のうち少なくとも一部に鳥取県内を組み入れ訪れていただくなど、特に旅行会社等の商品企画・造成に対する売り込み、本県へのアクセスについて旅行会社・旅行代理店窓口等のスタッフに精通していただくようなプロモーションにも注力し、本県の認知度を高めていくことが肝要である。

なお、その上で、台湾と県内空港との定期便化を目指していくに当たっては、本県から台湾へのアウトバウンド利用のほか、何より一定程度のビジネス利用が見込める路線となっていくことが必要条件であり、観光・文化交流から歩を進め、農産物などの輸出入をはじめ、ゆくゆくは製造業の連関や医療・介護サービスの相互連携といった、お互いの地域・社会が要請するニーズに呼応できる分野での連携などを進展させることが理想であり、本県の施策としてその側面支援を担う等の役割が果たされなければならないと考える。

元来、本県には、名探偵コナンの青山剛昌ふるさと館や水木しげるロードなど、訴求力の高いまんが・アニメのほか、海の幸・山の幸など質の高い食材が豊富な「食のみやこ」や、山陰海岸ジオパーク、大山をはじめとする自然景観や四季折々の観光資源、日本遺産の三徳山・三朝温泉などストーリー性のある文化的資産や、智頭の板井原集落など「昔ながらの日本」を感じさせるだけで

なく、蟹取県や星取県といったオリジナリティあふれる観光素材を持ち合わせている。これらの観光素材は、台湾の訪日ニーズの中で魅力ある観光コンテンツとして映っており、今回調査訪問した先々での意見交換を通じて、関西圏や山陽、四国などの近隣だけでなく、首都圏や中京圏、九州などと組み合わせても埋没しないだけの輝きを有する「強み」だと実感することができた。

今後は、隘路となり得る交通経路を丁寧に説明する、あるいは本県を結ぶ国内移動をオプションツアーとして造成していただく等の工夫を働きかけるといった取り組みとともに、従来の枠にとらわれない「異なるものの多彩な組合せ」としての広域的な誘客PR連携を図っていくことも、試みとしてあり得るのではないかと考える。

台中市においては、世界的自転車メーカー・ジャイアント社が立地し、今回訪問した後豊サイクリングロードのような鉄道廃線跡があるなど、もともとサイクリングコースを整備するための好条件が揃っていたこともあるが、海コース、山コースなど地理的条件に合わせた特徴的なサイクリング専用道を設け、サイクリングすることを目的とした観光誘客が図られていることについて、大いに参考となった。

昨今、国土交通省の主導によるサイクルツーリズムの推進は、訪日市場においてかつての「爆買い」に見られる買い物主体の「モノ消費」が一過性であるのに対し、受け入れる側としても持続可能な誘客策となる体験型観光、「コト消費」へのシフトに対応しようとするものである。

国内では、西瀬戸自動車道（しまなみ海道）や琵琶湖一周（ビワイチ）などが今年9月に創設された「ナショナルサイクルルート」に指定されたところであり、走行環境整備や受入ガイド養成など、ソフト・ハード両面で先行する事例としてすでに多くの訪日客がサイクリングを楽しんでいるところである。本県においても、「白砂青松 皆生・弓ヶ浜サイクリングコース」が一部供用開始となったほか、国道9号線を活用した「とっとり横断サイクリングルート」（仮称）の今後の整備・活用が期待される場所であるが、先行する国内他事例との差別化を図るよう努めることが当面の課題である。

その際、今回の台中訪問を前に、台中市政府顧問を務める裕毛屋の謝明達代表をはじめ、台中市議会議員などの一団約190名が来訪され、鳥取市・岩美町・八頭町を周遊するサイクリングイベント「第3回鳥取すごい！ライド」に参加されたところ、口々に「鳥取砂丘や浦富海岸の景観は素晴らしかった」、「コースを進むごとにさまざまな景色が楽しかった」といった感想があったことは、本県がサイクルツーリズムの好適地としての可能性を示唆するものと考えられる。

こうしたことを踏まえて、今後、国内外からサイクルツーリズムの受け皿となっていくためには、サイクリストに優しい施設としてのコース整備や修理・休憩ができる設備、地元ドライバーの配慮など交通安全意識のより一層の啓発などは欠くことができないものである。さらに、前述の「白砂青松 皆生・弓ヶ浜サイクリングコース」においては、今後タンDEM自転車の走行も可能とする動きがあり、視覚障がい者の方をはじめ、高齢者や体力に自信のない方も一緒に楽しめるサイクリングコースとなれば、本県らしい共生社会の実現を目指す一翼を担うものとなるのではないかと考える。

一方、台湾など海外からの受け入れに向けて特に留意すべきは利便性の向上を図ることであり、旅行者が自らの自転車を持ち運び、空路・海路を利用して直接本県に入る場合に対して、空港・港

湾におけるC I Q体制の増強、いたずらに多くの手間と時間をかけさせない出入国管理を行えることが鍵となる。あるいは近隣県の空港などから誘客を促すためには、持ち運びにいかにか労力をかけさせないかをポイントに、貨客混載の移動手段が用意できないか等の検討の余地がありはしないか、「コト消費」の具現化として期待されるサイクルツーリズムに、さまざまな観点から受入体制を整えていく必要性について申し上げたい。

次に、台湾における県産農産物などの輸出拡大・販路開拓策等について、現地調査に基づく所感について具体的に述べたい。

今回の訪問日程の中で訪問団一同が一様に落胆したのは、日本産農産物等を広く取り扱う商田實業を訪問した際のことである。先方からの説明の中で、今後、鳥取県産梨などの輸入を広げたいとのお話をいただいた一方で、現状、他県産の梨を多く取り扱っていることについての理由に、かつて本県と取引があったが8～9年前から他県産に切り替えており、「本県産二十世紀梨の果肉に糸状の黒斑が入り、食感も落ちていた」ことが2年続き、当時の鳥取県側（生産者側）に申し入れたが十分に対応してもらえなかった、との答えがあった。これについて「品質の特性上、二十世紀梨ではなく赤梨では？」と尋ねたところ、先方から明確な回答がなかったため事実関係はわからなかったものの、「鳥取県産の梨に良い印象を持たれていない」ことを突き付けられ、場合によっては、品質低下のなかった品種にもいわば風評被害のような影響を及ぼしている可能性も考えられることが明らかとなった。

同社側においては「日本産の『良いもの』を台湾に広く輸入したい」という思いは一貫されており、本県産の梨を含め今後の取引再開に躊躇がないことが確認できたが、梨の品質低下に対する原因説明や説明など、対応が不十分だったことについて問題提起せざるを得ない。

この点を踏まえて、責任の所在や事実関係が不明確ではあるものの、同社とのその後の取引が継続・回復に至らなかった以上は、まずは先方の評価を取り戻すことに努める必要があり、併せてこのことを契機に、これまでに県が関与するなどして取引関係につながったが、すでに取引中止となっている事例などがないか再点検し、状況把握とともにあらためて取引再開を目指した売り込み、営業活動を進めていただけるよう、県としても側面支援するなど積極的な関与と配慮をお願いしたい。

台湾の日本産輸入業者に「鳥取県といえば梨」との印象を持たれるまでの認知を獲得している一方で、本件のようなブランドイメージの回復には粘り強い努力が必要であり、生産者や生産者団体等だけでなく、とっとり国際ビジネスセンター、あるいは地域商社等とも連携を図るなど、県が旗を振り、関係者一団がワンチームとなって対応していただくことを期待するものである。

そのほか、目を見張るほど急成長を遂げるのは牛肉市場である。平成13年（2001年）に日本国内で牛海綿状脳症（BSE）感染が確認されたことを発端に、日本産和牛肉が台湾市場から一掃されたが、一昨年の平成29年（2017年）末に輸入解禁へと舵を切られ、台湾ではにわかにか和牛ブームとなっている。今回訪問した乾杯グループの、カジュアルでありながら高品質、高級・高価格路線を基本コンセプトとする店舗「和牛47」「麻辣45」「老乾杯」などはいずれも、特に若者を中心に「ブーム」で終わらない根強い人気定着しつつある感もあり、日本産和牛に対する底堅いニー

ズの高さが窺えた。

そのような状況の中、今年に入って鳥取和牛の取扱いを開始された同グループにおいて、来店客や従業員からも「日本産和牛の中でも鳥取和牛の味覚と香りはお世辞抜きに格段に良い」との評価を得ていることに訪問団一同喜びを覚えたが、市場への供給量が伴わず「幻の肉」と呼ばれる現状にもどかしさを感じた。

率直に、「日本産の高品質」に対する購買意欲に向けた鳥取和牛の輸出拡大可能性に期待を大きくしたところであり、「超売り手市場」とも言える今、敢然たる品質管理とともに積極的な販路拡大に努めていただくよう、県としても継続的なバックアップをお願いしたい。

このたび台湾における本県産品の販路開拓をテーマに調査訪問した、地元高級スーパーの裕毛屋、卸売業の商田實業、高級牛肉チェーンの乾杯集団、いずれからも、台湾の消費者の「高品質・高付加価値」に対する意欲や志向性が透けて見え、鳥取和牛や二十世紀梨だけでなく、本県のさまざまな食材にも商機が期待されるように感じたところであるが、反面、当然ながら忘れてならないのは、国内同様「陳列するだけ」では選んでいただけないということについて、三者共通の認識であることを確信した。

台湾市場、消費者の視点が成熟しているのは、「高品質・高付加価値」に対して、例えば「産地の顔が見える」、すなわち商品そのものの良さだけでなく、生産地の気候や風土、文化や関わる人々の思いといった商品の生い立ちや、商品の特性、ストーリー性など、いかなる価値を得られるかという点に負担を惜しまない志向であることに見て取れた。本県は国内市場を含め、ことさら量的な供給不足が隘路となることを指摘される場面があるが、大量消費社会にないこれらの志向性は、これからの本県の戦略的販路開拓策にヒントを与えてくれるものだと感じた。

最後に、今回初めて訪問した商田實業有限公司、乾杯集団のほか、議会会期中であるにもかかわらず丁寧かつ誠実に対応していただいた台中市議会、台中市政府、さらには、日本台湾交流協会台北事務所や中華航空台北支店、台湾日本関係協会、台湾観光協会、裕毛屋公益店の関係者各位には、伊藤団長を筆頭とする当訪問団を各所で敬意を持って友好的に受け入れ、熱烈な歓迎をしていただいたことに感謝したい。これもひとえに、これまで培ってきた日本と台湾との絆の深さと、強固な協力関係が積み重なり築かれてきた成果にほかならない。

―「最も大切なのは、『心の交流』である」。浜崎副団長が台中市議会との意見交換会の席上で呼びかけたこの言葉に対して、国境や言葉、立場の違いを超えて、皆が揃って笑顔に「讚！」（＝いいね！）とサムアップして応えた姿は、台中の夜にほのあたたかい思い出を灯し、明けて裕毛屋で一週間のうちに二度目、三度目の再会となる出迎えをしていただいた台中市議会議員等には「交流たるもの、かくあるべし」を学ぶ機会となった。

当県議会として、台湾、とりわけ台中市との間で、議会同士や自治体間の交流、農業、青少年、スポーツ、文化及び教育等、幅広い領域での親密な協力関係を継続するとともに、定期便化を目指したチャーター便の運航だけでなく、他空港を利用した周遊観光の受け入れ、人的交流や物流の一層の推進などさらなる加速化をはじめ、観光交流・友好交流の名に豊かな実が伴うよう、未来に向けた関係の深化をこれまで以上に積極的に展開していくべきものとする。

今後、今回の台湾訪問から得た成果をもとに、さらなる情報発信や施策提言を行い、日台間のこれまで以上の友好・親善と、人と人、心と心のつながりを土台とした相互交流の発展に尽力することを誓い、所感及び県政に対する提言とする。

4 日程表

月 日	日 程	移 動	宿 泊	
10月23日 (水)	8:40	鳥取砂丘コナン空港→羽田空港	ANA294	台北市内
	8:45	米子鬼太郎空港→羽田空港	ANA384	
	13:20	羽田空港→台北松山空港	NH851	
	16:30	・日本台湾交流協会台北事務所《意見交換》	借上バス	
10月24日 (木)	10:00	・中華航空台北支店《意見交換》	借上バス	台中市内
	12:00	・台湾日本関係協会《意見交換》	借上バス	
	14:00	・商田實業有限公司《意見交換》	借上バス	
	15:55	台北駅→台中駅	高速鉄道	
	18:00	・台中市議会《意見交換》	借上バス	
10月25日 (金)	9:30	・台中市政府《表敬・意見交換》	借上バス	台北市内
	10:30	・后豊サイクリングロード《調査》	借上バス	
	12:30	・裕毛屋公益店《調査・意見交換》	高速鉄道	
	15:00	台中駅→台北駅	借上バス	
	16:30	・乾杯集団《表敬・意見交換》		
10月26日 (土)	10:20	・台北華山1914文化創意産業園区《調査》	借上バス	
	13:30	台北松山空港→羽田空港	NH852	
	20:05	羽田空港→米子鬼太郎空港	ANA389	
	20:10	羽田空港→鳥取砂丘コナン空港	ANA299	

5 訪問先の概要

令和元年10月23日(水)

(1-1) 公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所(台北市)

〔応対者〕 星野光明 首席副代表(経済総括)、中杉元 経済部主任(観光交流組長)、
相馬巳貴子 経済部主任(貿易相談組長)

公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所を訪問し、日台交流の概況、特に日台間の定期航空路線を巡る情勢や台湾向けの本県観光商品の造成及び県産品輸出の促進について、説明を受け意見交換を行った。主な懇談内容は次のとおりである。

【主な懇談内容】

○ 台湾の政治・外交について

- ・ 総統選挙（2019年1月）まで残り3か月となり、テレビCMなどで候補者のPRが増してきている。
- ・ 蔡英文総統は一時人気落ちていたが、最近は、徐々に独立性が失われていく現在の香港情勢を目の当たりにして、台湾が第2の香港になってはいけないという危機感が強まり、民進党に再び回帰してきている。
- ・ 一方、対立候補と目される現高雄市長は、市政をないがしろにして総統選挙に専念すると公言したことをきっかけに、市民からの支持獲得が難航している状況。
- ・ 大陸側では、国民党の政権奪還を後押ししたい思惑から台湾の外交関係を狭めて失政を問う動きがあり、2016年の現政権スタート以降、大陸側の働きかけなどで7か国が断交を宣言。現在台湾との国交は過去最も少ない15か国となっており、世界保健機関（WHO）などでも台湾の参加を認めていない。
- ・ 日本は高齢化が進み人口比率として若年層、生産年齢人口が少ない。台湾は今後日本を上回るスピードで高齢化が進む可能性があるが、若者の政治参加、政治への関心の観点では台湾に学ぶべきところが多い。



星野首席副代表（前列左端）、中杉主任（前列右端）と記念撮影

○ 台湾の経済・産業について

- ・ 景況はそれほど悪くなく、現在年2パーセント台の成長を続けている。台湾は半導体産業を中心とした製造業が主力で、中国の輸入の約40%を占める。
- ・ 台湾にとって米中間の貿易摩擦にかなり影響を受けるのは必至であり、さまざまな経済政策を打ち出す中、米中貿易摩擦をいかに乗り切るかに極めて関心が高い。台湾から半導体部品を中国に送って組み立てて輸出、という流れの中で、特にiPhoneなどのように関税の上下によって大きく影響を受ける可能性があり台湾企業の混乱は免れない。
- ・ 台湾政府としては、大陸に進出した台湾企業に対して金利優遇政策を行うなど台湾に戻ってくるよう促しているほか、ベトナム、フィリピン、インドネシアなど第三国への展開を支援するなど、中国への依存度を下げるよう努力している状況。
- ・ 台湾の主要都市別には、北から南へ順に、まず台北は本社機能が多数。国際空港のある桃園は光学電子の大手企業が所在し、新竹はIT関係の企業が集積している地域。台中は機械産業、機械加工が集積し、例えば自転車メーカーとして有名なジャイアント社も拠点を置く。高雄はどちらかというと重厚長大で、石油化学、鉄鋼、金属加工などに強み。総じ

て高速鉄道が通る西側の地域に産業が集中している。

- ・ 地方同士の継続的な交流に向けては観光の往来だけでなくビジネス面でのつながりが必要。例えば医療・介護・リハビリなどの関連産業について見れば、台湾では高齢化が進むものの介護保険制度がなく、介護福祉施設や在宅ケアサービス等が未成熟で、低賃金の外国人労働者を雇用しての介護労務などが少しずつ見られ始めている程度の「黎明期」であり、将来的なビジネスチャンスとなる可能性もある。

○ 日台間の投資・貿易、台湾の消費市場について

- ・ 歴史的には電子部品、機械関係など製造業を中心とした結び付きが主流でかなり成熟した関係性と言える。昨今はサービス業にシフト。投資においては、台湾フォックスコンによるシャープ買収、昨年台北101タワーへの伊藤忠による出資など、大型案件も耳目を集めた。消費者に身近なところでは、古くは「モスバーガー」など、最近では「いきなりステーキ」「コメダ珈琲」、回転寿司チェーンなどの進出も見られる。
- ・ 台湾の消費市場としては、日本のブランドを熟知しておりスーパーなどでも日常的に日本の農産物が並んでいる。東日本大震災の影響としてまだいくつか輸入禁止措置が残っており、お茶など産地証明が必要なものもある。日本政府として撤廃を求めているものの解決に至っていない。
- ・ 2017年、牛肉の輸入が解禁されて以降、和牛に人気が集まったが、ここ最近は落ち着いてきており、消費者のニーズは「本当においしい牛肉を食べたい」など成熟化している様相。野菜・果実の輸出に向けては残留農薬の規制に留意する必要がある一方、今年7月に食品関係の関税が下がりチャンスと捉えたい。特に日本酒は40%から20%にまで大幅な下げ。

○ 日台間の観光・旅行者について

- ・ 台湾から日本への渡航者は、2018年が約476万人（台湾の5人に1人が来日している計算）であるが、日本から台湾へは約197万人。日本からの渡航者は徐々に伸びてきているものの、今なお大きな格差がある。
- ・ 2018年の日本国内における国籍（居住地）別外国人延べ宿泊者の構成割合をみると、東北・北陸の各県をはじめ、中国四国地方では島根県、岡山県、香川県、愛媛県、高知県など、地方部を中心とする20県で台湾からの受け入れがトップとなっている。
- ・ これらの県の特徴として挙げられるのは、定期直行便が就航していることもさることながら、台湾での観光誘客プロモーション活動などにおいて1自治体が単体で取り組むのではなく、複数の県、北陸や瀬戸内などといった広域エリアでの取り組み、さらにはインバウンドだけでなくアウトバウンドを含む誘客・送客相互の促進策に取り組んでいることにあると思われる。台湾の訪日客は1点集中ではなく広く転々と周遊するような自由旅行が好まれる傾向にあるとされている。
- ・ 岡山空港に就航する定期便は2016年の週3便が好調だったことで、現在はデイリー運航となった。島根県では広島空港に就航する定期便からの誘導のため、広島—松江間の周遊500円の格安バスを走らせる取り組みも行われており、いかに周遊ニーズを取り込むか各地が

アイデアを競っている状況が見て取れる。

- ・ 鳥取県は岡山県と共同で東京新橋にアンテナショップを構えており、海産物でも日本海と瀬戸内海とで全く異なる商品提供ができるなど、連携により厚みのあるアピールができるほか、星取県、蟹取県など四季折々の観光資源や素材が豊富で、台湾の個人旅行客のニーズに訴求しやすいと思われる。

令和元年10月24日(木)

(2-1) 中華航空台北支店(台北市)

〔応対者〕 李建勳 資深經理、姜紀中 副理、陳佳伶 主任、吳鎮峰 主任、張詩如副主任

中華航空の台北支店を訪問し、今年11月15日から12月5日にかけて運航する台北桃園・鳥取空港間のチャーター便について、今後の定期便化への可能性等について意見交換を行った。主な懇談内容は次のとおりである。

【主な懇談内容】

○ 日本への定期便・チャーター便の運航状況について

- ・ 今年11月から桃園・鳥取間で運航予定のチャーター便は、すでに搭乗予約率が93%で、まもなく満席となる。また、中華航空子会社のマンダリン航空がチャーターする台中・鳥取間も、11月末までの運航予定であるが、現時点(10月24日現在)ですでに平均6割超が埋まり販売は好調。
- ・ 今回はインバウンド専用のチャーター便であり、台湾でしかチケットが販売されていない。できれば台湾・日本の両方で販売される方がコストダウンを図れる。台湾の春節や、日本の桜の花見シーズン、立山黒部山開きなどの時期に合わせたチャーター便は人気が高い。
- ・ 台湾から日本国内へ最近非常に増加している訪問先が東北地方。単体ではなく、東北ブロック全体で熱心に売り込みをかけていることが大きい。ただ中華航空としては、東北地方は競合他社が多く厳しい路線で、定期便を運航していない。一定のビジネス利用が見込めるかどうかをシビアに見ており、定期便化にはビジネス利用が全体の3割に達することを一つの目安としている。
- ・ 訪日訪台のアンバランスの是正が望ましいとされるが、台湾側の訪日意欲が日本の訪台機会を減らしているのも事実。中華航空としては、極力日本人の訪台利用を狙った運航時間帯を設定するなど努力しているところ。



李建勳資深經理(右側奥から2人目)による説明

- 鳥取県にはまんが・アニメなどのコンテンツやジオパークをはじめ季節ごとに楽しめる観光資源がある。毎年継続してチャーター便を運航したいと考えているが、今後あらためて、鳥取から台湾への送客が見込めるようであれば、広島支社との調整を踏まえて相互チャーターの運航も検討の余地がある。



李建勳資深經理（中央）と記念撮影

（2-2）台湾日本関係協会（台北市）

〔応対者〕 台湾日本関係協会 謝柏輝 副秘書長、呂宗翰 科長、劉倍碩 科員、
台湾観光協会 陳家祥 副秘書長、藍宜芳 専員

台湾日本関係協会主催の昼食会を開催していただき、日台間、とりわけ本県が取り組む地方政府間のさらなる交流推進等について意見交換を行った。主な懇談内容は次のとおりである。

【主な懇談内容】

○ 相互交流について

- 米中の貿易摩擦や北朝鮮の核ミサイル開発、香港の対中デモ、日韓の元徴用工問題など、東アジア情勢が不安定な中、台湾と日本は価値観を共有する重要なパートナーであり、ゆるぎない信頼関係にある。
- 台湾にとって日本は、親交がある他のどの国よりも緊密で、互いに第3位と第4位の貿易相手国。相互往来者数は昨年680万人に達し、このうち台湾からの訪日が約480万人、日本からの訪台が約200万人。会社の社員旅行や学校の修学旅行など、さまざまな機会にぜひ台湾にお越しいただきたい。
- 台湾観光協会では今週、大阪・名古屋で開催されているツーリズムエキスポ2019に出展中。台湾人は日本が大好きで、年に何回も日本を訪れる。日本人にもっと台湾に来てもらえるよう継続して努力していきたい。
- 鳥取県は昨年台中市と友好交流協定を締結したところ。例年の連続チャーター便の航空路



謝柏輝副秘書長あいさつ

線を土台に、観光だけでなく文化交流・経済交流などを通じて相互に発展していく関係性を築いていきたい。

(2-3) 商田實業有限公司 (新北市)

〔対応者〕 林 啟森 董事長、陳あかり氏

台湾で大手農産物輸入卸業を営み、鳥取県など日本国内の高品質青果物を中心に台湾大手百貨店やスーパー等に販路をもつ商田實業を訪問し、県産農林水産物の販売実情と拡大可能性について意見交換した。主な懇談内容は次のとおり。

【主な懇談内容】

○ 本県産農林水産物の台湾での販路開拓について

- ・ 鳥取県とは、以前から二十世紀梨などで長く取引を続けているが、最初の10年間ほどは良好な関係だったものの8～9年ほど前に二十世紀梨(※)の果肉に黒い糸のようなものが入っていたり食感が落ちていたりなど、品質面に問題を生じたことがあった。(※議員から「二十世紀梨ではなく新興梨など赤梨ではないか」との指摘あり)
- ・ 問題を生じた初年度に鳥取側(生産者側と思われる)に伝えたが翌年も同様の問題があり、十分な対応を得られなかったことから、取扱量を減らして大分県の日田梨にシフトしてきた経緯がある。
- ・ ただ、卸売業の立場としては、台湾の一般消費者に「よいもの」を広く販売していきたいと考えている。今夏、鳥取県産業振興機構・とっとり国際ビジネスセンターの仲介による商談会実施をきっかけに、今後、台湾で1、2を争う規模のデパートで鳥取県産品のフェアを計画している。時期は未定だが、すべて買い取り販売を予定している。同センターの継続的な商談の側面支援と、鳥取フェアへの集客にこれから強いアピールが必要だと考えている。
- ・ その中で、とりわけ鳥取県ならではの名探偵コナンや鳥取砂丘などを前面に押し出したい。エバー航空が機体にハローキティを載せたように、名探偵コナンの飛行機でチャーター便を飛ばし、青山剛昌先生に1日でもフェアに来てもらうことができないか、ぜひ後押ししてほしい。著作権使用の許可などハードルは高いと思うが可能な範囲での協力を願いたい。
- ・ また、福岡県フェアでは薩摩揚げの調理販売が非常に好評だったことから、鳥取県フェアでも店頭で調理してその場で提供するような実演コーナーを設けることができればよいのではないか。
- ・ 台湾での鳥取県のイメージは梨くらいしかない。名探偵コナンは推理するおもしろさもある



林啟森会長(左奥)による説明

リエリート・知的水準の高い層に極めて人気が高い。組み合わせたPRができれば観光訪問先としても爆発的に人気が出るのは間違いない。

- ・ 八頭町の田中農場とは白ネギなどを中心に継続的に取引関係がある。最近、カレーライスやチャーハンに合うお米「プリンセスかおり」を開発したと聞いており、大変興味がある。また、長いものは北海道産を年間数百コンテナ輸入しているが、台湾では短冊に切ってスープに入れるくらいしか食べ方のアイデアがない。すりおろしてごはんにかけるなど、簡単でもレンピなど調理法と併せて紹介すれば消費者に手に取ってもらいやすい。
- ・ 甘酢漬けや黒らっきょうなど、らっきょう加工品も訴求可能性がある。台湾の家庭でも食卓に並ぶ食材であり、「日本ではカレーライスに添えて」、あるいは健康意識の高い層に成分や効能などをアピールするのも効果的。
- ・ 椎茸については、干し椎茸は売りやすく買ってもらいやすいが、生椎茸は賞味期限が短いこと、輸送もコスト高のエア便とせざるを得ず難しい面がある。
- ・ 桃やブドウなどに関連して、岡山県の伊原木知事は毎年のようにトップセールスに来られる。



林啟森会長（左から3人目）との記念撮影

る。日本産の高品質な果物や農産物は台湾で依然人気が高いことから、例えば中秋の名月の進物用として梨を出すなど、季節柄やストーリー性などを交えて販売戦略・品目を練っていくことも必要。

雑談の中では、高校野球の話題などで意思疎通が図られた。林啟森会長が子ども時代から社会人まで20年近く野球に取り組まれた経験などについてお話を伺った。

(2-4) 台中市議会（台中市）

〔応対者〕 張世禎 秘書長、張 事務局専門委員、彭 広報室長、陳 行政室長、ほか

台中市議会主催の歓迎夕食会を開催していただき、鳥取県議会議長から台中市議会議長あての親書をお渡しするとともに、鳥取県と台中市との間のさらなる交流の推進等について意見交換を行った。主な懇談内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 地方同士の交流継続について

- ・ 2000年に鳥取県知事が訪問して始まった交流は、農業・観光・スポーツ・文化など幅広



伊藤団長から張世禎秘書長に、藤縄議長から張清照議長への親書を預けた

い分野に広がり、昨年11月には台中市と鳥取県との間で友好交流協定の締結に至った。また、台中から鳥取空港へのインバウンドチャーター便運航に合わせて、台中市から多数の方々が鳥取県を訪れ、サイクリングイベントへの参加、議会同士の意見交換会など、親交を深める機会を得た。

- ・ 台中市政府、台中市議会から約20名が参加したサイクリングイベント「鳥取すごい！ライド」は好天に恵まれた。台中市においては鳥取県との交流の歴史は長くて頻繁。この絆を大事にしていきたい。
- ・ これから将来に向けて、地方同士の交流が大切。観光、農業、産業など分野はいろいろあるが、一番大事なのは心の交流。継続的に関係を構築していくことが必要。
- ・ (台中市議会側で鳥取県訪問団の一員として来県された方とは3日ぶりの再会ともなり、全員で親指を立て「讚！」(=いいね!)の合言葉とともに笑顔の絶えない交流となった。)



張世禎秘書長（前列中央）と記念撮影

令和元年10月25日(金)

(3-1) 台中市政府 (台中市)

[応対者] 令狐榮達 副市長、饒栢丞 観光旅遊局科長、陳鈞堯 同股長、林政勳 観光工程科長ほか

昨年11月に本県と友好交流協定を締結した台中市政府を訪問し、未来に向けた交流推進を約束するとともに、台中市が進めるサイクルツーリズム政策を中心に、地域の遺構の観光資源化やソフト・ハード両面での整備・活用策などについて説明を受け、意見交換を行った。主な懇談内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 観光をはじめとする自治体間交流の深化・継続について

- ・ 「第3回鳥取すごい！ライド」には台中市政府、議員による訪問団を編成して鳥取県を訪問したところ、平井知事、藤縄議長はじめ多くの方々に歓迎していただいた。
- ・ 友好交流締結を含め、例年の相互交流、昨年は台中フローラ世界博覧会に参加いただいた。先日の鳥取県訪問に続き、頻繁な往き来・交流が実現し大変喜ばしくありがたいこと。
- ・ 来年2020年には台中市で台湾ランタンフェスティバルを開催することが決まっており、ぜひ鳥取県から御参加いただき、皆さんに再会できたらと思っている。鳥取から伝統芸能団の招致も予定している。
- ・ 台中市は自転車メーカーのジャイアント社が製造拠点を有していることもあり、サイクリングロードの整備に注力してきたが、観光誘客にもつながり、地域の観光資源となった。
- ・ 現在、コースは計90本、総延長約691キロメートルにわたり、オーシャンロード、リバーロード、マウンテンロードなど5つのテーマで体系的に活用促進を図っている。
- ・ 各コースにはステーションを設け、地域住民によるエイドサービスを行うなど、地域活性化も企図するレジャー施設となり、利用者には「台中市サイクリングロードアプリ」によりサイクリングロードの紹介や周辺観光情報だけでなく、自転車のレンタル予約、宿泊施設情報、グルメ・食事情報、ロード近くの病院情報など、安心してサイクリングを楽しめるよう情報・サービス提供を行っている。



台中市政府庁舎の前で記念撮影



令狐栄達副市長（前列右）と記念撮影

- ・ 「鳥取すごい！ライド」のサイクリングコースも、世界ジオパークのエリアなど風光明媚だったと聞いているが、本日御案内する后豊サイクリングコースは日本統治時代の鉄道跡地で鉄橋やトンネルなど眺望もよく観光客に楽しんでいただけるはず。

- ・ 台中市内にはサイクリングだけでなくハイキングロードも充実させており、台湾や海外からも手軽に楽しめる健康ツーリズムの地域として誘客促進につなげている。
- ・ 今後とも鳥取県・台中市の間でお互いに良い取り組みを学び合う関係性を未来にわたって築き上げ、絶えることのない交流を図ることができたら幸い。

(3-2) 后豊サイクリングロード (后豊鉄道廃線跡) (台中市)

〔応対者〕 陳鈞堯 台中市観光旅遊局股長、ほか

台湾屈指のサイクリングの聖地・台中市において、ロード整備状況を視察するとともに、サイクリングを通じた観光誘客策について調査を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ サイクリングコースの整備状況と観光誘客策について

- ・ 「鳥取すごい！ライド」のコースでは、鳥取砂丘、浦富海岸など非常に素晴らしい景観で、途中でラクダも目撃した。上り坂もあったが「次はどんな景色が見られるか」コース全体を通じて非常に楽しめるコースで、新規あるいはリピーター誘客に高いポテンシャルを感じた。
- ・ ただ、生活道路として車両や歩行者と共用するものであるため、安全確保などには細心の注意が必要である点も見受けられた。
- ・ 台中市では鉄道廃線跡や海沿い、川沿いなど、専用ロードとして整備できる環境があったことで、安心して走行できるよう整備することができた。雨の少ない気候でもあり、田園風景、橋梁、トンネルなど、爽快感を感じていただけるはず。
- ・ 2020年2月に后豊サイクリングコース近くで台湾ランタンフェスティバルが開催される。フェスティバルの期間に合わせてサイクリングも楽しんでいただけるようPRしていきたいと考えている。
- ・ 副市長が説明した「台中市サイクリングロードアプリ」では、利用者に対する利便性向上を図るだけでなく、地域で運営するサイクリングステーションに対して「一つ星」から「六つ星」まで評価をつけることで、サービス力強化、ひいては住民意識の向上、地域活性化にもつなげている。
- ・ ロードにおいては、自動車やオートバイと異なり細いタイヤが影響を受けないよう路面状態を逐次確認するほか、路面や看板などの交通標識、ガードレールや街灯なども適切に管理するよう努めている。
- ・ レンタルステーションでは二輪自転車が数百台、四輪4人乗り自転車も多数用意され、い



旧鉄道橋をサイクリングコースに転用

ずれも日本の原動機付き自転車と同様、右手をアクセルに、足で漕がなくても走行できる電動車両であり、高齢者や体力に自信のない方にも十分に楽しめるレジャー施設。

- ・ これまで日本人のサイクルツーリズム客も受け入れてきたが、(当日も茨城県からの観光客があった)、今後さらに多くの観光客を誘致できるよう、情報発信にも努めていきたい。鳥取県とは姉妹都市となったことで、サイクリング交流、温泉交流、「砂像交流」など、さまざまな分野で相互交流を図っていきたい。

(3-3) 裕毛屋公益店 (台中市)

〔応対者〕 裕毛屋企業股份有限公司 謝明達 執行総経理 ほかに従業員の方々

台中市議会議員10名程度、張世禎 秘書長、台中市政府職員の方々

台中現地農業協同組合の方々

台中市などで高級スーパーを展開する裕毛屋の謝代表取締役社長を表敬し、裕毛屋主催の歓迎昼食会の御招待にあずかったほか、今回の訪問中に開催されていた鳥取県物産展の現地調査を行うとともに、今後の鳥取県産品の輸出・販路拡大策について意見交換を行った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 鳥取県物産展の視察を通じた台湾における日本産農産物等の市場概況について

- ・ (株)裕源が経営・展開する台湾中部の高級スーパー「裕毛屋」では、謝明達社長の指導のもと地元・神奈川県や鹿児島県、愛媛県などの農産物が取り扱われ、各県との共同で物産展を開催するなど日本産の輸入に積極的。
- ・ 謝明達社長が台中市政府の顧問を務めていることもあり、昨年、友好交流協定の締結を契機として鳥取県物産展を開催され、2回目となる今回は10月25日から3日間の予定で実施。初日の販売状況等を視察した。
- ・ なお、昨年の物産展開催から継続取引に至った商品もあるほか、商談を経て新規出展が5社あるなど、バイヤー・サプライヤー相互に、鳥取県産品の台湾市場進出可能性に期待が増しているところであり、商機を見出したのはやはり果樹、特に梨については執行部から事前に報告のあったとおり、9月の新甘泉PR試食会で来店客から高い評価があったとのこと。
- ・ 店内では、高品質で安心安全な日本産の農産物や果物に人気が高く、裕毛屋では商品の8割が日本からの食品で占めており、それぞれの食品コーナーに鳥取和牛、輝太郎、シャインマスカット等が陳列されていた。
- ・ また、特設コーナーとして、境港総合技術高校の生徒2名と同行教員1名による店内でのカニ汁の振る舞いが人気を博し、生徒はカニ帽子と法被姿でPRし物産展を盛り上げた。
- ・ 特に台中市民の消費者ニーズとして、台湾の中でも比較的、経済的に生活に余裕があり、家族世帯が多いことに着目し、安全・安心で高品質な商品を揃える高級スーパーの位置付けをコンセプトとしており、陳列商品、内装、食品コーナー分けなどは日本国内のスーパー

一と錯覚するような店舗構成としている。

- ・ 日本法人(株)裕源が日本国内各地から食品等の商材を調達して輸出しており、加工食品は無添加・無農薬の日本食材を使った完全オリジナルブランド商品を製造、保存料を使わず冷凍販売している。
- ・ 当日は店内の一角をパーティションで仕切って意見交換会場として使用したため視察できなかったが、弁当類、惣菜類の調理を店内で行っており、その調理も日本産の無添加・無農薬食材を調理・提供しているとのこと。
- ・ 台湾では親日・知日の方が多く、それぞれの産地別のブランドイメージでの訴求に一定の効果を見出しており、今回の鳥取県物産展でもサプライヤーや自治体（執行部：市場開拓局など）、高校生のマネキン役など「お客様に産地の顔が見える」販売を原則とし、商品を通じて人と人とのつながりやバックグラウンド（産地の情報、特徴）を含めた「縁をつなぐ」役割を担っている。
- ・ 来年2月には台中市で開催される台湾ランタンフェスティバルに合わせて第3回鳥取県物産展を開催していただけるとのこと。



現地実習で店頭にたつ境港総合技術高校の生徒、台中市議会議員らとともに記念撮影

（3-4）乾杯集団（台北市）

〔応対者〕 平出荘司 取締役代表、本村結城 顧問、ほか

台湾で和牛肉を扱い高級飲食チェーン展開する乾杯集団を訪問し、鳥取和牛のブランド評価や今後の輸出拡大可能性を調査するため、グループ経営者や店舗従業員等に現況や現地の嗜好性などを聞き取った。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 乾杯集団グループについて

- ・ 国際交流員として鳥取県に勤務していた彭曉如さん（平成20年1月～23年5月）が勤務。彭さんを通じて昨年10月にとっとり国際ビジネスセンターが県内畜産農家等の視察に招へいし、今年に入ってから精肉卸の(株)はなふさとの取引を開始。
- ・ グループは焼肉居酒屋を出発点に、



平出荘司代表（右端）による説明

焼肉店や鍋料理店を台湾だけでなく中国本土の主要都市に展開。旗艦店の「老乾杯（カンパイクラシック）」はカジュアルさと高級さの両面を打ち出し若者からお年寄りまで幅広い層の来店を獲得、「おいしいものには支出を惜しまない」台湾人のニーズを捉えた。

- ・ 「和牛47」や「麻辣45」のメイン店舗は台北101タワーのある信義区の最上層に出店。いま台湾で最も注目される副都心のようなエリアで、展望ビューの良さと高級感・高品質感から予約が殺到しておりうれしい悲鳴。「和牛47」では月4,000万円程度の売上。
- ・ 出店まもない新概念店「麻辣45」は、真っ赤な「地獄鍋」のような火鍋の店舗で、特に若者からの人気を得ている。火鍋はもともと重慶の名物だが、2018年に焼肉居酒屋を重慶に出店したことをきっかけに逆輸入。ただ、重慶の火鍋は脂が固まるのが難点だが当店は不飽和脂肪酸が多く固まらない和牛の牛脂を使う。あまりサシの入らない、焼肉などに使いにくい赤身の肉が合うことから、焼肉用、火鍋用など使い分けができ、チェーン全体として効率的な仕入れができている。鳥取和牛オレイン55は焼肉にも火鍋にもいい。
- ・ 2017年末から日本和牛の輸入が可能となるまでは豪州産和牛が最高級だった。現在は豪州産和牛交雑を月15トンくらい、日本和牛を月6~7トン。稀少で付加価値のつく日本和牛を少しずつ広げている。中国では日本和牛が禁輸であるため台湾で日本和牛、本土で豪州和牛、といった使い分け。来年あたりからは日鉄物産（本村顧問の出向元）と連携して肉の加工・卸売りの展開も考えている。
- ・ 店舗の基本コンセプトとして、お客様と店舗スタッフがコミュニケーションを図りやすいのが売り。台湾人の気質として人なつっこさ・フレンドリーさがあり、中華圏の中ではホスピタリティが抜群。今後日本からのインバウンドを狙い「るるぶ」など日本に向けた広告や特集記事などで売り込んでいく計画。
- ・ 中国本土への進出先は、上海、北京、深圳、広州、重慶。異常とも言える成長スピードだったが、最近はずいぶん緩やかになっている感もある。ただ、深圳についてはIT企業なども集積し経済成長に非常に勢いを感じており、「高級・高品質」へのニーズも衰えていない。

○ 台湾における需要・嗜好性について

- ・ 市場の供給量はアメリカ産、豪州産、NZ産、日本産の順で、日本和牛はまだまだ台湾人のニーズを量的に満たしていない。消費量は現在和牛だけで1人当たり年7kg程度。
- ・ 台湾人は食べるのが好きで「旅行に行く」イコール「食べに行く」。日本への旅行目的は何より食べること。食に対してお金を惜しまない傾向。
- ・ 台湾の食文化の一つとして安くおいしい屋台が盛んに見える。日本人が好む観光訪問先として「夜市」が各地にある。
- ・ 中国本土の嗜好は「辛い」「しょっぱい」料理が多いが、台湾はどちらかと言えば「甘い」「塩気がたっていない」料理が好まれる傾向。日本のラーメンをそのまま台湾に持ってくると、塩辛いと言われる。台湾に店舗展開するとき最初に当たる壁が台湾人の味覚に対する微調整。ただ一方で、台湾は海外の料理・味覚を受け入れる土壌があり、デパートのレストラン街などには台湾料理は6割程度にとどまる。

- ・ 台湾の牛肉の自給率は5%で輸入依存。米国産はBSE問題があったことをきっかけに安心できる豪州産や日本産が好まれる傾向。
- ・ 台湾ではタンやホルモンが好まれない、と言われるが、店舗でも多数注文を受ける。ホルモンが特に女性から敬遠される傾向にあるのは事実だが、それは香りの強い豚肉の場合で、牛肉のホルモンは臭いがなく食わず嫌いの状態。実際食べると好まれるが、タン同様、供給量が少ないのがミスマッチの原因。
- ・ 日本の牛肉の輸入関税はキロあたり10円（33円）。定額関税なので牛肉自体の単価が高額なほど有利。ただし内臓系は定率関税なので総量として入ってこないのが実情。

○ 鳥取和牛の評価と今後の取引可能性について

- ・ 「老乾杯(カンパイクラシック)」ブランドオーナーの立場として鳥取和牛を試食したが、ほかの日本和牛ブランドとの違いは、おいしさもさることながら、肉の香りの良さが別格で、鳥取和牛はお世辞抜きに良い。お客様からの評判も非常に良く、「この肉は日本のどこのものか」等、尋ねられることも多数ある。
- ・ 難点は品薄であること。月20~30頭程度仕入れているが、鳥取和牛は月2~3頭ほどしか手に入らず「幻の肉」。場合によっては希望する等級、部位などとのミスマッチもあるが、乾杯集団ではチェーン全体として、基本的に部位の選り好みをせず1頭丸ごと使う。
- ・ 仕入量が少ない理由は値段ではない。コンスタントに出していれば買う。「鳥取和牛もっと売ってくれ」と求めている状況。
- ・ また「和牛47」や「麻辣45」などで「鳥取和牛フェア」などが開催できたら爆発的に人気が出るのは間違いない。鳥取和牛の良さを知れば「台湾から鳥取県に鳥取和牛を食べに行く」という流れができる可能性も期待できる。

令和元年10月26日(土)

(4-1) 台北華山1914文化創意産業園区(台北市)

[応対者] 現地ガイドほか

工場跡地をリノベーションして若者の文化発信拠点や観光スポットとして利活用する事例として台北華山1914文化創意産業園区を視察調査した。主な調査内容は次のとおりである。

【主な調査内容】

○ 地域資源の活用について

- ・ 台北華山1914文化創意産業園区は台湾高速鉄道・台北駅や地下鉄駅からも程近く、ビジネス街からも至近で、都会の中の憩いの公園のような立地。かつては日本統治時代の酒造工場であり、2007年以降、建物や敷地をリノベーションして観光資源化したもの。



ボランティアガイドによる案内

- ・ もともとあった環境との調和や多額の投資を伴わない整備を念頭に、内装の工夫や日常的に手入れ・小修繕を行うことで維持管理している。
- ・ 日本をはじめ海外からの観光客が訪れるだけでなく、休日などには地元の若者からお年寄りまで幅広い来園者があり、建物ごとに絵画、写真・ポスター、アニメなどの映像作品、玩具や食器、小物類の土産品販売コーナーもあるなど、それぞれに趣が異なり飽きさせないミニテーマパークの様相。
- ・ 入園は無料であり、休日には地元の学生など無償ボランティアによる園内ガイドツアーを行っており、ボランティアに携わることで、地域の変遷や建物等の歴史的価値など地域の資産について地元学生たち自らが学ぶ機会ともなっている。
- ・ 芝生広場はイベント会場として利用されるなど、地域交流拠点として、あるいは文化発信拠点として機能している。
- ・ 本県内においては、当該園区ほどの規模ではないとしても、周辺環境と調和させた改修・リノベーションにより、持続的に人が集う地域の交流拠点として、空き家対策や中心市街地活性化策のヒントとなる可能性を感じた。

以上